はじめに

2019 年 10 月 12 日、令和元年東日本台風により、川崎市市民ミュージアムは甚大な被害を受け、地階にある全ての収蔵庫に浸水して水没し、収蔵品約 26 万点のうちおよそ 23 万点が被災した。弊社では被災直後から被災作品のレスキュー活動に関わらせていただいた。また被災前より収蔵品の保存修復を手掛けさせていただいたことで保存されていた被災以前の作品の記録も活用しながらレスキュー修復の活動をおこなってきた。
今発表では、渡辺豊重の制作したアクリル絵画の浸水被害を事例に、アクリル絵画の特有の症状と、それに対応する修復の処置を報告する。被災した絵画については事故の痕跡をすべて取り除くことは難しい場合が多い。作品と、どのように向き合うか、また収蔵品として保存・展示する作品のための処置を進めるにあたって、さまざまに考察し、当該作品の修復処置を終えることとなった。また、弊社では、2018 年、西日本を襲ったいわゆる平成 30 年 7 月豪雨による被災絵画の修復にも携わり、台風や豪雨災害による被災作品の調査や修復を継続的におこなってきたことから、今回はその経験も踏まえながら調査・修復を試みた。
今回のアクリル絵具で描かれた作品の症状は極めて特異であり、40 年ほどの経年を経ても、絵具層が柔らかく膨張する特性を現した。一定の時間、汚損した水に浸かることで、絵具の層間に水が侵入し、トンネル状の剥離を発生させ、チューブ状の浸水痕を残した。このような症状は、経年によって現れる劣化の症状への対応とは異なり、処置には修復の倫理観をはじめ、相応の考察が必要となる。今発表では、そのような特殊な症状に対応した修復処置を報告するものである。

1. 渡辺豊重　「かたち（光の中の君）」アクリル絵具を色材に用いた絵画の材料と技法

今回の修復の対象となった作品の一つ、渡辺豊重が 1975 年に制作した「かたち」は油性と見られる白色の地塗りが予め施された市販のカンバスを木枠に張り込み、アクリル絵具を用いて描画した作品であった。当該作品は 2015 年にも弊社の修復工房で洗浄や支持体の補強などの修復処置をおこなった経緯があり、当時の資料を参考にしながら修復の処置を進めた。

画面は黄色や青色、赤色といった絵具を用いて、画面の広い範囲に平滑に塗り込んでいる。アクリル樹脂を展色剤に使用したアクリル絵具は、媒材や水の混合の量によって形状が様々に異なる。水を多く混合した場合は、水彩絵具のような半透明な色材となり、また混合する水を少なくすることで、チューブから出したそのままのペースト状で可塑性も持つ、極めて不透明な色材として描くことも可能だ。この作品では水を多くは混合せずマヨネーズのようなペースト状態に近い絵具の硬さで描いているように見える。

2. 汚水の浸水によって現れた特筆すべき絵具層の症状

今回の被災では地下の収蔵庫が汚水で満たされ、一定時間水分に浸かった状態から以下のような様々な症状を表した。

支持体

a. 麻布のカンバスが水分を含み再び水分を放出して乾燥する過程でカンバスが縮み、木枠がそれに連れて著しく歪んでいる。

地塗り層・絵具層

b.汚水が接着剤の役目となり、作品の付近にあった紙片や汚物が画面に固着した。

c.画面には様々な汚れが付着し、薄黒いカビやシミが広い範囲で現れている。

d.汚れは画面の色価や光沢を奪い適切な色調を失っている。

e.特質すべき症状として、汚水の浸水により、地塗り層からの層間の剥離を発生させ、その中に水が侵入して流れ込み、絵具層はチューブのように膨張し、後に水が抜けたところでシワ状の浸水痕が現れた。厚塗りのアクリル絵具は一定時間の浸水によって柔らかくなり、ビニールのように伸縮し、このような特異な症状を引き起こしたと見られる。これらはアクリル絵具の柔軟性を表した一つの特性と見ることができる。同時に乾燥後の絵具層の固着が著しく弱まっている。

３．今回の症状に対応する修復処置について

作品に現れた症状について、以下のような修復処置をおこなった。

3-1.作品に付着した汚物や物体等は除去した。

3-2.汚損し変形した木枠は、新しいものと交換することとした。

3-3.ストリップライニング（カンバスのヘリ部分の裏打ち）をおこない脆化した支持体を補強した。さらに浸水して固着の弱まった絵具層に張り直しの際に生じるストレスを軽減するため、ルースライニング（あらかじめ木枠に麻布を張り込んでからその麻布にオリジナル作品を乗せる様にしてソフトに張り込む手法）を用いた張り込みをおこなった。

3-４.画面、裏面の洗浄をおこなった。

3-５.次に、この度の症状について、特質すべき、最も問題となった症状が絵具層に発生したトンネル状の浸水痕に対応する処置である。この症状に対して、いくつかの対応処置を想定し考察した。

a. チューブ状の絵具層を切開して取り除き、シワ状の縮みを伸ばし、接着剤を塗布し再び
b. 貼り付ける。
c. シワ状に余った絵具を切除し、取り除いてシワを平坦に伸ばしてから再び接着処置する。
d. チューブ状にシワになった部分に注射器を用いて接着剤（加水分解を起こしにくく接着の強すぎないエチレン・ビニル・アセテートによる接着剤を用いる）を注入し、空洞になった剥離や浮き上がりのみを接着し、最小限に残存したシワ状の絵具は、ありのままに残す。

今回の修復については、a. b.の処置では、シワの痕跡を消すことが期待できたが、比較的オリジナルを傷つける工程が最も少ない c.の手法を採用することとした。

4. 終わりに－ 今回の修復処置の考え方と実践

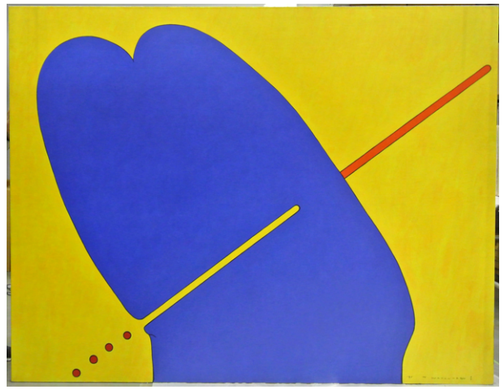
今回の発表では、アクリル絵具の特性と見られる、一定時間の浸水で柔らかくなった絵の具が引き起こした特異な浸水痕に対して、画面に残存したシワをどのように取り扱うかを検討した。最終的に判断した方法は、シワの痕跡を消すことを期待しながらシワを切開し貼り直したりするような処置はせず、浮き上がりのみの対応という比較的オリジナルを傷つけないようない控えめな処置にとどめることに留めた。修復の倫理を鑑み、原画を

遵守するため、切開や貼り直しは適切ではないという考えにおよび、シワの痕跡も残しながら注射器等で接着剤を注入し浮き上がり箇所を接着することを目的とした。
被災当初、当該作品を制作した本人、渡辺豊重氏の意見として「作品の上で起こることは作品の歴史」と言う画家の残した作品と向き合う考え方も考慮し、加えて被災した美術品の傷跡を全て隠すのではなく、ありのまま向き合うような大局的な視野で保存や展示に臨む川崎市市民ミュージアムの方針も受け入れながらの処置の方針となった。その後の被災作品への対応処置の一つの規範ともなり、この考察を提言として学会で発表する運びとなった。

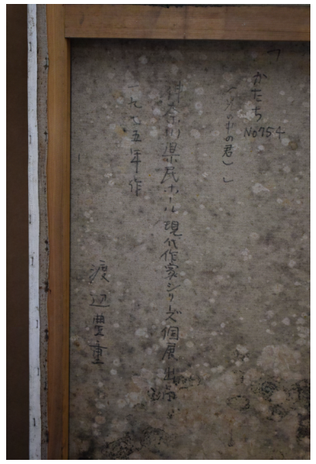
渡辺豊重 作「かたち（光の中の君）」カンバス・アクリル　970×1935mm の 修復

被災後の画面全図

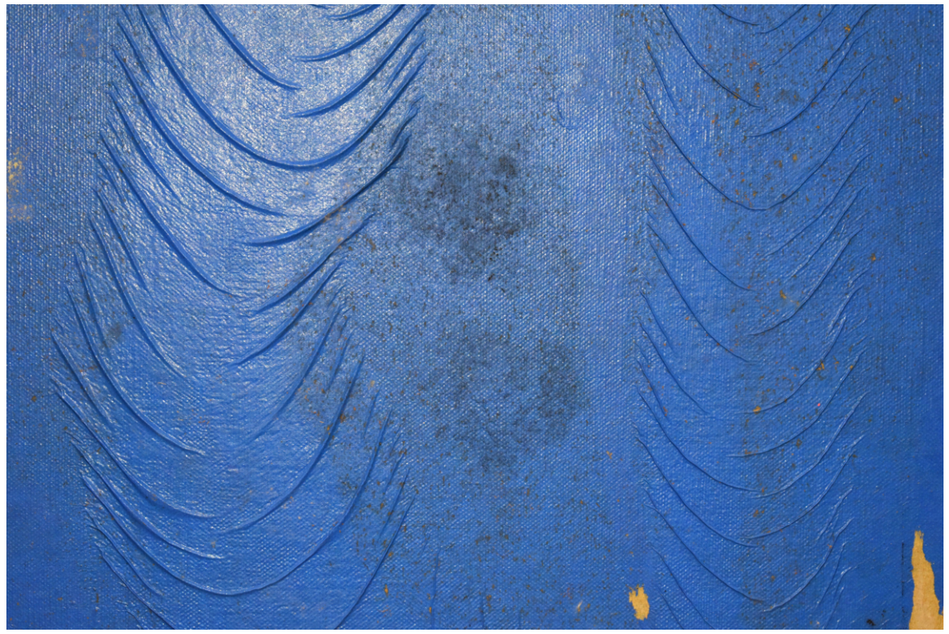
カビに覆われるカンバス表裏



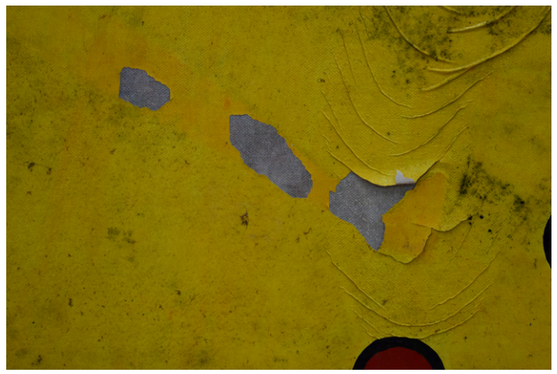
2015年に修復処置を行なった際の画面



↑被災後の裏面・署名や記述、また側面にはタックスのサビ付き、強く歪んだ木枠が確認できる。



←画面の絵具層には汚水が侵入し、乾燥後トンネルのようなシワ状の痕跡が残された。



画面左下方：地塗りからの剥落、浮き上がりが確認できる。

画面右下方：作品を包んでいたとみられる紙片がこびりついている

修復工程写真

1.

画面洗浄

2.

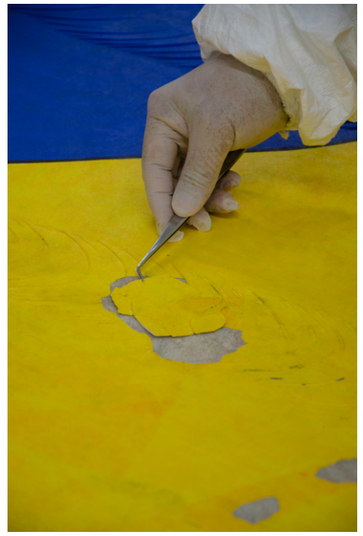
3.

2~3付着物の除去

4.

5.

6.



↑　4~6 剥落し、紙に固着した絵具片を剥がして元の位置に戻し接着。

7.

8.

9.

10.

↑　7~10　紙片の付着した浮き上がり箇所への処置：まず紙片ごと浮き上がりを接着し後から紙片を除去する

トンネル状の浸水痕への対応処置

↑地塗り層と絵具層の層間に浸水したとみられる
痕跡。排水した乾燥後、シワ状の浮き上がりを残した。

12.浮上がりを接着

←浮き上がり
箇所に注射器
を用いて接着
剤を注入する

13.

接着剤の注入後に
加温加圧により
接着→

15~18 支持体の処置

作品には以前の修復の際に支持体の補強として取り付けたライニングの麻布が残存しており、その布を除去し、新しい麻布を取り付けた。さらに新しい木枠を新調してルースライニングのための麻布を予め張り込んでオリジナルカンバスを張り直した。

14.

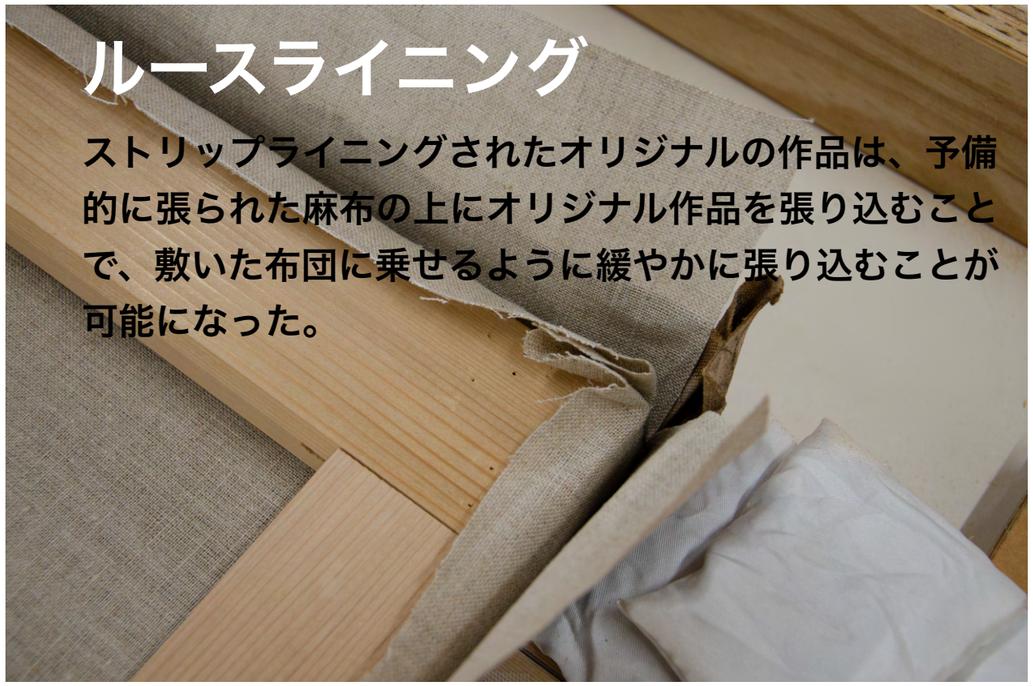
最終的にシワ状の痕跡だけをを残し空洞のみを接着した→

15.

16.

17.

18.



写真は木枠→麻布→ストリップライニング（縁裏打ち）されたオリジナル作品の順番。

19.

修復後ー 全図と裏面